

83

ジョン・ハンターとホーム家の人々〈3世代〉

青木 國雄

愛知県がんセンター

英国の外科医、博物学者で名高いジョン・ハンターと、ホーム家の3代、妻、父、義弟、甥とのかわりは医学史上重要であると考え、紹介する。

1. ホーム家：スコットランドの名門で、12世紀すでに伯爵の家柄とよばれ、代々武勲、領主としての誉れが高い。

2. Robert Boyne Home (1713-86)：妻の父。外科医で、英国とフランス・スペイン連合軍との7年戦争中、ポルトガル戦線でジョンと知り合い、それがきっかけでジョンは長女のアンと婚約、7年後結婚した。Robertの8人の子どもの第2子、長女である。

3. Ann Home (1742-1821)：アンは美貌で威厳と気品を備え、教養があり、詩人、音楽家として認められ、洗練されたマナーとウィットで社交界の花形であった。ジョンの仕事に理解を示し、支援を惜しまず、自らも社交界で活躍、尊敬をあつめた。

4. Everard Home (1756-1832)：Robertの第8子で3男。大学に進学せず、ジョンの下で6年医学を修め、18歳で海軍軍医、その後、ジャマイカで英国陸軍の外科医として1778年まで勤務。この間、生物研究も実施、イソギンチャクの多食虫、Serpulsを発見。28歳でジョンの助手を務め、1792年St. George病院の解剖講師となり、結婚、独立した。1787年に博物研究で王室アカデミーの会員となった。ジョン・ハンターの死後、ジョンの業績の一部を出版したが、大部分は保管し、それを逐次自分の名前で発表、アカデミーでの地位を確立する。王家の人々を治療し、1788年にはArms(紋章)を授与、1808年にジョージ3世の外科医となり、翌年、王の5男(公爵)が暗殺未遂で受けた首の手当に成功し、王家の信頼を得る。1813年王室外科学会のマスター、男爵、Sirの称号を得る。1814年、王室協会の副会長、1822年Royal Charterを授与。しかし、1823年、ジョンの業績をハンター博物館に提出するよう要請されたが応ぜず、カタログ作りを進める中、Everardの論文の大部分が、ジョンの業績の盗作とわかり、詰問される。Everardは曖昧な返答を繰り返し、一部の資料のみを返却、その後、沈黙、自宅に引きこもった。非難を浴び、経済的にもよくなかった彼は、酩酊状態で暮らし、1832年死亡した。

5. James Everard Home (1798-1853)：Everardの長男。弟2人、妹4人いる。

Jamesは海軍にあこがれ、12歳で志願し、極めて優秀な成績で軍艦勤務をつとめ、6年後、19歳で将校の試験に合格、王室海軍大学に入学、在学中に西インド諸島でも活躍。1822年昇進して艦長となるが、一旦軍艦勤務を中断し、博物研究を始める。父の死後、遺産を整理し、発見したジョンの業績記録を王室協会へ返却、またジョンの記念品を寄贈。1834年、艦長として軍籍に戻り、スペイン戦争に従軍、ブラジル、アマゾン河口のパラの包囲戦に加わり、1841年には阿片戦争中の中国に派遣された。1843年にはオーストラリアの沿岸警備、ニュージランドの植民地保護や原住民の内戦の調停に尽力、原住民、英国植民両者から感謝される。1845年、現地の紛争に介入し、1847年に平和を回復させた。1847年軍務を終えた。1853年ニュージランドを訪問時、オークランドで体調を崩し、死亡した。葬儀はクライストチャーチで功績をたたえ、極めて盛大におこなわれた。

彼は暇をみつけては各地の動植物を採取し、オアエニア、中国から1400種以上の植物、海洋動物標本をロンドンへ送り、英国博物館では2種の植物に彼の名がついた。王室アカデミーの会員になり、多くの独創的論文を発表し、高い評価を受け、父の汚名を雪いだ。

(引用文献 発表当日に示す。)